
~ 鏡 ~

岸田高貴

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（鏡）

【Nコード】

N0261Z

【作者名】

岸田高貴

【あらすじ】

夢と現実の冒険世界

バトルありLOVEありそして少々のエロ

登場人物は個性的なものばかり。

主人公は現実世界へ戻れるのか！？

ブローグ

くブローグく

僕は時々思う「これは夢なのだろうか。それとも、現実なのだろうか。」と考えながら一人で歩いてきた。

ところで、ここがどこなのか僕にも分からない。

言っちゃああなたが、教えて欲しいものだ。

確かこれは夢だったはず・・・？

ダメだな喋っているのか思っているのかもわかんなくなってきた・

そんな感じで、多分結構な日が続っている。

（こんな感じで、数日間いや正確には6日間、歩いているのは崎岳^{さき}流^{りゅう}である）

今から、6日前。

いつものように朝起きて鏡の前に立つ崎岳の日課である。

（ここで、今日も決まっているな。なんて思っていたら、気持ちが悪。ヤバイ寒気がしてきた。）

「ここであれが来るんだよな。」

『ながるゝ早くしないと遅刻だYO！』

（俺の名前を「ながる」と呼ぶのは、幼馴染の永墨^{ながすみ} 智吾^{ともわ}である。

ついでに、こいつは文字だけ見たら必ず男子と思われる、確かに性格的に男なのだが。しかし、黙っていればすごく可愛い子だ。）

（ながるじゃなくて、りゅうだって。）と思いながら、

「わかってるって。」と答えておこう。またどうせいつものだ。

いつものワンパターンにそろそろ飽きてきてたころだなあ。と思った時だった。

いつものようにドアが開き、俺に向かって通学用バックが飛んでく

る。それをクールにかわすはずだった。

ドアを開くまではいつも通り、そこから、バックつ。(って、あれ

?なんだこれ。)

まさかのドロップキック「グハッ」

そこからの記憶なし。

そしてこの場所にやって来た。

第一章 RING the ring

第一章 RING the ring

「あゝ、疲れたア」

（ん、暇つぶしなら乗ってやるぜ）

（いきなりどこからか声が聞こえてきた。しかし・・・）
「?!」

「自分の思っていることすら違ってくるようになってしまったか。」

（おいおい、そこはびっくりしろよ。）

「一回びっくりしたみたけど、ダメだったか？」

（でも、お前の心の声じゃないんだなあ）

「じゃあ、どこ。もしかして・・・」

（実際痛いんだけど、あ、足踏んでるんだけど。）

（崎岳は、足元を見てみたが、何もない。よくよく見てみれば、
・・・）

「リング？まさかっ ふっ」

（それデース。リングですよぉ）

「どれどれ？」

（一応、崎岳はリングを拾っておいた。持ってるのもなんなので
指につけようかと思ったら・・・）

（ちよっ。まった。兄さん勝手に付けられちゃあ困るねえ）なぜ
かリングが指に入ろうとしない。大きさが違うわけでなく、磁石で
反発されているような感じがあった。

「なんで。入らな。い、ん、だ？」

（俺の力、つきたいなら俺の条件を呑みな。）

「条件ねえゝやだやだ。めんどくさいから、捨てるよ。」

（おいっ。ちょ。おまっ。捨てるとかマジねーわー）

「だって条件だなんてめんどくさいじゃん」

（分かった、とりあえず聞こうぜ。条件を・・・？）

（（崎岳は、リングの話を聞かずに地面にリングを置こうとした。）

（いいから、条件なんてどうでもいいから。とりあえず一人にしないでください！！）

「あら、いきなり敬語になった。じゃあ、遠慮なく。」

（順応はやっ。まあ、いいかあ）。ん？でも、付けていいなんて言っていないなあ。あれ。くっ、してやられた。）

「ところで、君の名前は？」

（（崎岳は、リングの名前を聞きたかった。））

（そうねえ、じゃあ一応・・・）

「決まっていらないなら僕が決めよう。」

（えっ。えええ）

「そうだなあ、BLACK RINGでどうだ？」

（そうか、何で英語だし。まあいいやあ）

（（タラタッタタタ、新しい仲間BLACK RINGが増えた。という感じで新しい仲間が増えた崎岳出会ったのだが、ただの喋るリングだ。））

「ところでBR。ここどこ？」

（どこか知りたいなら、ここから北にずっと行くといいよ。）

「分かった。行ってみるよ。」

（（この話は、いつ進むのか第二章ではきつと進むはずである。））
「待っているお、東のどこかあ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0261z/>

～ 鏡 ～

2011年12月1日00時50分発行